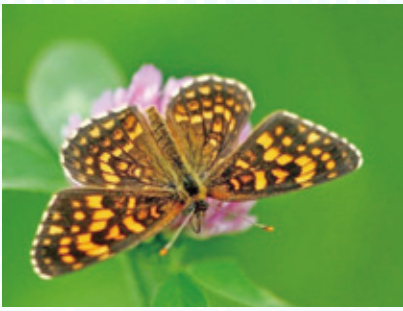


希少なチョウ「ウスイロヒヨウモンモドキ」

毎年六〜七月頃に恩原高原に舞うチョウ「ウスイロヒヨウモンモドキ」は、環境省レッドリストで絶滅危惧ⅠA類（ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの）に分類され、種の保存法において国内希少野生動植物種に指定される大変珍しいチョウです。

成虫は羽を広げた大きさが三・五〜四・五cm程度の小型で、羽の表は橙色に黒褐色の条線が走ったような斑紋があります。オスはメスよりもやや小さくて腹部が細長く、メスは羽がやや丸みを帯び腹部が太く、ゆらゆらと風にゆられるようにゆつくりと飛ぶことが特徴です。



ウスイロヒヨウモンモドキ

昭和46年に富で採集された標本
(井上立氏採集)

観察会の様子（恩原）

国内では中国山地とその周辺の草原に生息していましたが、一九八〇年代以降から生息地が激減し、環境省HPによれば、現在生息が確認されているのは岡山県と兵庫県のみとされています。岡山県内でもかつては県北部を中心に七〇ヶ所に生息していましたが、現在は新見市・鏡野町でしか確認されていないようです。町内では昭和四六年（一九七二）に富の白賀溪谷で採集された記録もあり、恩原以外にも生息していたことがわかります。

このように生息地が激減した要因としては、人間の生活様式の変化が大きく影響しています。かつて、高原地帯の草原は採草地や放牧地として利用されていたため、人の手によって管理されており、ウスイロヒヨウモンモドキの幼虫の食草となるオミナエシやカノコソウなども多く自生していました。しかし、こうした必要性がなくなったことで草原が放置され、樹木が生えたり丈の高い草が生えるなど植生が変化し、食草が成長しにくい環境となったことで、チョウも繁殖することができなくなることが大きな原因として考えられます。当然、大規模な開発による生息環境の破壊も原因の一つです。上齋原では約二五年前から保護活動が始められ、平成一五年（二〇〇

三）には、チョウやガを研究対象とする学術団体である日本鱗翅学会自然保護委員会の下に、岡山県恩原高原ウスイロヒヨウモンモドキ特別委員会が設置され、地元と研究者が一体となって採集の規制や環境整備、卵塊、幼虫、成虫の観察など本格的な保護・研究活動が取組まれることとな

りました。そして平成二五年（二〇一三）には、その活動主体が上齋原ふるさと掘り起こし委員会ウスイロヒヨウモンモドキ部会に引き継がれ、地元中心での活動が行われています。

こうした取組みによって、県内の他地域の生息地では個体数が減少する中、恩原高原では増加傾向にあり、その活動成果が評価され、平成三〇年には「ウスイロヒヨウモンモドキ生息地」として県指定文化財（天然記念物）に指定されました。

近年はシカによって食草や草の葉についた卵塊を食べられることを防ぐため、防護網の設置も行うなど、地元の方による地道な保護活動が繁殖の維持につながっています。

そろそろ恩原高原の生息地では羽化した成虫が舞う姿が見られます。地元団体による観察会も開催されていますので、機会があれば是非ご参加してみてください。ただし、国内希少野生動植物種は法律で捕獲が禁止されていますので、見学の際にはマナーを守ってご覧ください。

参考：『チョウ類保全ガイド―ウスイロヒヨウモンモドキ』恩原高原のウスイロヒヨウモンモドキ―その調査と保護活動―(一)(二)、環境省ホームページ
協力：奥高雄一（倉敷市立自然史博物館）、藤木 精二

鏡野町教育委員会 生涯学習課 日下
電話(0868)54-0573